



ヤマユリ (ユリ科ユリ属)

日本特産のユリで、ユリの王様と言われている。本州の近畿地方以北の山地や丘陵地のススキ草原に生える。個体数は町では近年激減している。球根は食用として利用される。(花期6～8月)

# 続々 人は緑の 息吹と共に

何気ない野山の植物や、野鳥の鳴き声、昆虫の営み……  
 そんな身近な自然に、ふと目を向ければ、  
 普段、忘れかけていた何か……  
 そう……「自然の息吹」を感じる瞬間があります。  
 環境問題について議論されている昨今、  
 私たちが住む富里の自然は  
 将来どのように変化していくのでしょうか……  
 今回は、平成2年から富里の野山に入り、  
 丹念に植物の観察や研究をしている、  
 折目庸雄さんのレポートから、「人と緑の共生するまち」富里町の  
 自然などについて、お届けしたいと思います。



オオイヌノフグリ

(ゴマノハグサ科クワガタソウ属)  
 ヨーロッパ原産で明治初期に渡来した帰化植物で越年草。冷たい風の吹く早春から日だまりでポツポツと咲き出す。ぱつちりと瞳を見開いたような、この花を見て春の到来を感じる人は多い。

(花期1～5月)



クズ

(マメ科クズ属)  
 秋の七草の一つ。大和の国栖の人が根から澱粉をとって、売って歩いたので自然にクズと呼ばれるようになった。山野のいたる所に生え、花は葉裏に隠れるように咲き、甘い香りを漂わす。

(花期8～9月)

(写真・文：三浦 勇さん)

# 富里の豊かな自然を守るべく……

自然は私たちに、多くのことを語りかけてくれます。町に生育している一個の植物からも、

歴史的背景や当時の暮らしを伺い知ることができます。

それらの植物の視点から、私たちの住む富里を眺めてみると、

大変豊かな自然に恵まれていることも分ります。

この富里の豊かな自然を永く後世に残すために、

今、私たちにできることはなんでしょうか。

その答えは、もしかしたら、実は身近なところに

潜んでいるものなのかも知れません……

……それは、私たちの住む、身近なまちの「特徴」を知ること、

「歴史」や「自然の息吹」に心を寄せることから始まります。

## 台地と谷津、帰化植物

テレビや、報道などで、よく「自然環境を守る」という言葉を耳にします。

そのような表現は、時として、何か「大変なことをしなければならぬ」という気持ちを、抱いてしまうことがあります。

しかし、自然は富里に限らず身近な所や、人の思いの及ばない所で、たくましく生息しており、「自然を守る」ということも、実は、そんな身の周りのことから始まるのではないかと思います。

そして、この町の自然を特徴づけるものとしてはまず、『台地と谷津』



街角特派員  
折目 庸雄さん（御料）

1928（昭和3）年生まれ  
教員を定年退職後、本格的に植物調査を始め、1993（平成5）年に「富里の植物」を刊行（残部なし）。その後、芝山町、酒々井町の植物誌の調査を終えて、再び富里の追加植物調査活動を始めています。「富里の植物改訂版」も刊行できればと、雨天でなければ、心にも『疑問と、好奇心』を持って山野を歩き回っています。稲刈りの終わった田んぼや山道で見かけたら、気軽に声を掛けてください。

をあげることができません。成田空港

建設の候補地にもなった富里町は、見渡す限り平らな台地を所々に浅く、また深く削り取る「谷津田」が開け、古い集落が点在していました。

縄文時代以前から、台地にはシイやケヤキなどの「大木」が散在し、クヌギやコナラの「雑木林」と、スキヤチガヤなどの「草原」が地表を覆っていたと思われまふ。谷津に

おける斜面には、カタクリやクスが、ひっそりと四季を告げていたことでしょう。台地と谷津という単純な地形にも、実に色々な植物が、今なお命を保ち続けているのは驚きです。

次に、『歴史と自然』のかかわりという観点では、例えば、センダイ

スゲでは、「40万年前に現在の富里付近まで、海があった」ことが推測できますし、シャコタンチクという笹からは、その名前から北海道産である笹が、「なぜ富里に生育するのか」という疑問を持つことができます。それはまた、人々の暮らしや歴史を知る手がかりにもなります。

また、明治期の富里では、下総御料牧場を始め、中小の牧場や農場で、牛馬の生産・育成が行われ、中でも御料牧場では飼料用に、20〜30種の牧草が輸入されていたことが文献に記録されています。

この輸入された牧草のほかの植物の種子が混じって、牧草と一緒に蒔かれ、発芽・開花し、町内や周辺市

町村で見られるワルナスビ・キキョウソウなどが、広がったのではないかと考えられています。  
このように外国から日本に入り、生活を始めた植物を『帰化植物』と言います。「他の地域に比べて帰化植物が多い」のも、富里町の特長の一つです。

そして現在では、成田空港に隣接する富里町には、知らないうちに、飛行機や荷物・乗客に付着して運ばれた種子がこぼれて、新しい帰化植物が増えるのではないかとという疑問がよく持たれます。

原則として、新しいものを新しいと決めるには、古いものがすべて分かっていないことが前提になります。



ミドリカナワラビ  
(オシダ科)

千葉県では山田町と富里町にしか生育は確認されていない。富里町でも草地に潜っていて、かるうじて命を保っている。

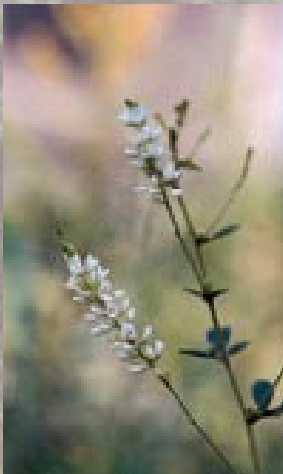
最重要保護植物  
(写真：神谷 勝さん)



ナガエミクリ  
(ミクリ科)

現在、千葉県で唯一生育が確認されている種類で、最重要保護植物に指定されている。水中や水辺に生育し、白い花は6～9月に咲く。

最重要保護植物  
(写真：赤木信一さん)



イヌハギ(マメ科)

造成した宅地とその周辺に生育している。したがって危機的な状況にあるとも言える。全体が金色の毛で覆われ、一見してそれと分かる。 要保護植物(写真：小林宏次さん)



センダイタイゲキ  
(トウダイグサ科)

関東・東北で5か所程度の生育が確認されているが、この種類の研究家に「その中でも一番良い群落だ」とお墨付きをもらっている。

重要保護植物(写真：大場達之さん)

そのためにも、現在の植物の種類をきちんと調べておくことは、後々のことを考えると、とても大切なことではないかと思えます。

今の富里にある植物

少し難しい用語に「維管束植物」という言葉がありますが、これは、茎と葉が分かれている植物という意味で、これに限って言えば、富里町には、現在1,588種類の植物が確認され、今後の調査での追加植物を加えても約1,600種前後と考えられます。

この数は、富里の自然が予想をはるかに超え、豊かな自然に恵まれていることを意味しています。

確認した標本は、すべて千葉県中央博物館に収蔵され、その数3,500以上になっています。

その中の貴重な植物としては、千

葉県でただ一か所生育が確認されている「ナガエミクリ」、千葉県で2か所目に発見された「ミドリカナワラビ」です。これらは、最重要保護植物で、本当に貴重な植物です。

また、群落としては「日本で一番」と言われる「センダイタイゲキ」や

宅地開発や山林、田畑の管理などが論じられ、植物の種類によっては、その絶滅や減少を心配する声も聞かれます。

しかし、一方では山野の思いがけないところで、栽培植物などが新たに自生したり、環境の変化や都市化の影響からか、新たな種類の植物が増え続けているという現実もあるのです。

北総台地では珍しくなった「イヌハギ」なども、自然環境の変化などによつては、いつ無くなるとも言えない植物の一つです。

富里町には、最重要保護植物は3種、重要保護植物が10種、要保護植物43種が生育しています。